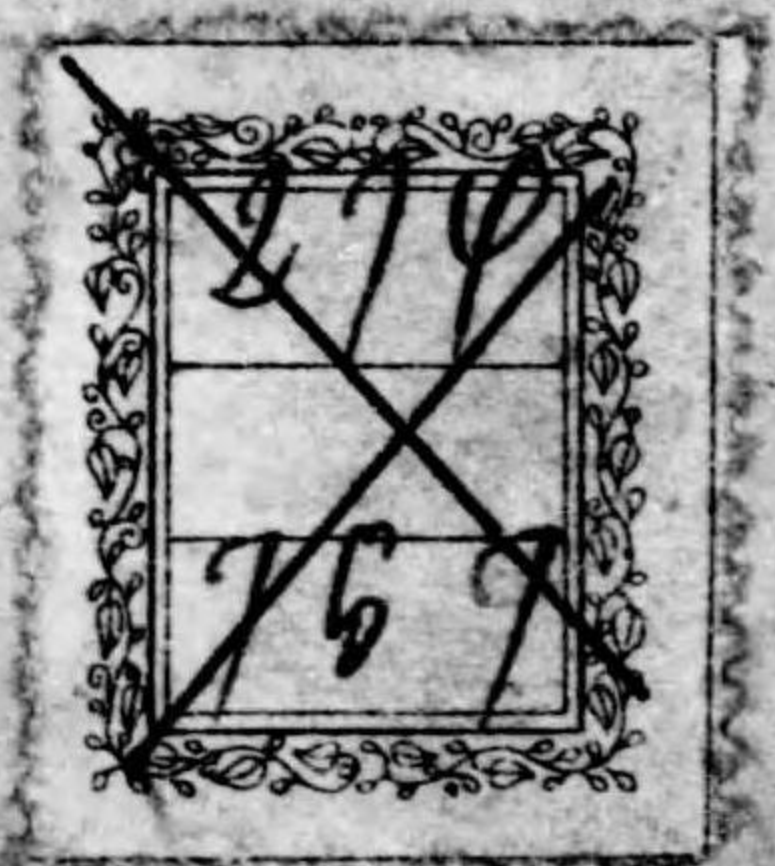


滑稽
奇談
頓智
百話



始







奇妙々々

奇妙々々は手品其の他の諸傳授、出来る出来ぬは極めて保證の限りにあらねど、失策るも春の日の慰み、まづたまされた氣でやつて見玉へ、

◎玉子に文字を出す傳

白き蠟にて何にても玉子に書きつけこれを酢の中へ一時ほごつけおけば文字あらはるゝなり

◎精神刺肉の傳

晒蒟蒻をゆで、柴蘇にていろをつけ刺肉につくるべし

◎ながいものを結ぶ傳

ながいもの性質能く眞直なるを撰出しよく洗ふて少し乾してこれに鹽をふりかけおくと自由になるなり

◎水の出所を知る傳

井戸を掘らんとする時は、まづ炎天に其所へ砂をまき、又其上に紙をおき、紙に水けのあがり下になりおる砂に水けのつきてかはかざる所は、必ず井戸を掘りて水のいづるなり

笑ひ草

一笑ひ 不精者

ある男、極めて不精にて、何事も働くことは嫌ひにて、朝より晩まで、臥てのみくらしけるが、ある朝、止むにやまれぬ用事ありて、遠く立ち出で、行く事とはなりけるに、晝食の料にとて、握飯をこしらへて貰ひたれど、之を手にはさげると、面倒なりとて、ふどころに置いて、たちいでぬ、風いと寒き冬の日なり、此男手をふどころにして、あゆめり、さて晝頃になりて、腹いと減りたれど、例の不精者なれば、ふどころ手を

出して、握飯をさらんこと、いたく面倒がりて、餓をしのぎつゝ、ゆくに
向ふより來れる男の、編笠着たるが、大に口をひらきたれば、彼の不精
者思ふやう、かく口を開けるは、必ず腹減りて、物のほしければならむ、
いでや頼んで見むとて、こやく、御身にたのみたきことあり、われふ
ところに握飯あまたもてども、出すが面倒にて、爲に餓をしのべり、御
身が口を開きたまへるは、思ふに、亦同じく餓を催したまへるならむ、
半分をまゐらせんほどに、懐より握飯取出して下さらずやと云ひければ、
其男からくと笑ひ、われも笠の緒ゆるみて、笠、風に飛ばんとするを、
手を出すがいやなれば、口をあけ、顔を長くして、笠の緒のゆるみを支

へ居るなり、腹はへらぬにあらねど、人の爲に手を出して、握飯を取り
出ださむこと、思ひもよらずと答へけるとぞ、揃ひもそろひし不精者な
り、

二笑ひ 理屈

やくにたゝぬむすこ飯を喰つては二階にへあがり、一日寝てばかりある
ゆる、親父大きに腹を立て、やいゝ悴われはまアめしを喰つて寝ては
かり居るが、そのやうに身を持つたらおもひやられたものぢや、何か役
にたつことをして錢を取ることを考へてみる 悴「わたしも錢をもうける
事を此間中から考へて居ます 親「めしを喰つては寝へ〜して何か錢儲

けになられるものだ 悴「責めて牛になつて車でも引きませうかとぞんじ
まして、

三笑ひ 小言しなん所

さる處に小言指南所といふ看板かけし内あり、すいきやうもの、八とい
ふ男、これを珍らしきことに思ひ、少々小言を習はんと玄關にかゝりお
たのみ申しますといへば、内から弟子が出て 弟子「ごなたでござります
八「わたくしは近所の者でござります、先生おやごならば今日よりお弟子
にならうと存じてまゐりました 弟子「これはこれはようお出で、先生内
にてござる、さあ〜座敷へお通りなさいと座敷へ通す、先生出でむか

ひ、八に貴様は何しに來た 八「今日より、お弟子にならうと存じて 先「
何おれが弟子になり來た、ぶしつけ千萬、なせ一年も二年も前に約束
をしないでさしつけがましいなせつゝかけて來た、其分にしておかれぬ
慮外者手打にすると刀をひねくるゆる、八膽を潰し、是はけしからの氣
ちがひだと腹を立て 八「此べらぼうめ、何しに一年も二年も前に約束を
するものだ、教へる事がいやならば教はらぬぶんの事、先生かといへば
いゝかと思つてつきあがりのしたべらぼうやらうめ、うぬに手打になつ
ていいものか、たわ言つくとふみ殺すぞよと立ちあがる 先「おちついた
顔にて、よほど御下地が見えます、

四笑ひ 長命自慢

百五十歳になる親爺、わしは六百七十歳になるが、まだ足も腰も耳も目
何もかも達者と自慢にて嘸すゆゑ、若衆寄合、おやちさんそんなら昔
のいくさのあつたのをしつてお出でなさるか おやち 『それを知らいでよ
ひものか、八島壇の浦のいくさもよく見て覚えて居ます 客』なかく軍
を見ることはならぬものどきましましたが、よく怪我もなく見られました
の おやち 『そつどのぞいて見たが、さてくをそろしいとさ 客』それは
どうして何處で おやち 『淺草のからくりで、

五笑ひ 藥罐と冬瓜

我が里に面白き翁あり、名を善右衛門といへり、常に洒落なることのみ
して人の頸をはづさせたり、あるとき、日暮れになりて旅より歸らんと
しけるに、山路にかゝりて、只一人なるに、もの淋しきこといはんかた
なし、道づれもがなと思ふほどに折よくも先だちて古鐵買の行くあり、
おいつきて、こはよき友を得たりとて喜びて、ともく種々のものが
たりなごしつゝ行きけり、古鐵買、家に歸るなりとて別れんとするに、
善右衛門の翁いふやう、我家にも古鐵の賣るべきもの數多あり、君のも
のを見れば藥罐をも持ち給へるか、我にはこれより、今二まはりまさり
て大きなるがあるなり、それを賣らんに、此處よりは遠くもあらねばこ

て、しひて道づれに伴れ歸りけり、さて翁家に歸りて、道伴の禮などいひてひたすらにもてなす、古鐵買のいふは、はや時もうつりぬればかの古金をこそ見せ給へといふに、翁尙出ださんともせで、茶などくみ來りてもてなす、古金買いらちて、此藥罐より二まはり大きなりといひ給へるもの早く見せ給へといふに、翁打ちるみつゝ奥に行きて、やがて持出でたるは、大いなる冬瓜にぞありける、古金買これを見て、こはとうがんならずやといふに、翁、さればとよ、此ぞ藥罐より二まはり大きいとうがんにて八くわんより十かんは二まはり大きからずやとて大聲に打笑ひければ、古金買も意の外にあきれかへりてふきいだして笑ひけりとな

ん、さて夜も更けたればとて、その夜は古金買を懇に宿して翌朝歸せり
さといふ。

六笑ひ 學者とあきめくらの争

ある人、文盲なるものを異見して、世の交りは他のことはいらず、唯勘忍の二字をよく守るべし、といへば、文盲の人は頭をかたむけ、勘忍とは四字にて侍らずやと、指をもてかぞへ、御許にはおぼし違ひなるべし、かんにと四字にて侍る、といへば、異見する人いふ、愚昧の人かな、勘忍とは、だへしのおとよみて、二字なりといへば、また頭をかたむけたへしのおなれば又一字ふえたり、五字と成り侍るべし、何と仰せあり

とも、我等は四字と思ひはべれば、四字にてかんにんは致しはべる事なり、といへるに、其人またいふ、汝がごとき愚昧の文盲は、實に論じがたし、人に傾て虫同様なり、おのれがまゝにすべしと、大にいきごほりければ、文盲の人笑ひて、何とも仰せあるべし、我等は堪忍の四字を知り侍れば、悪口せられても、少しも腹立ち侍らざるなりとて、笑ひ居しとぞ、其智には及ぶべく、其愚には及ぶべからず、

七笑い 疝癢の手傳

いさゝかの事にも事々しう打ち腹立ちて、關係なき他しものにも怒をうつし、八つ當りにあたりちらして、そこらにありあふ物を投付け打

毀しなどするは、これ度量狭くして、然かも我儘なる性質の人ぞかし、あるところにかゝる癖の人ありけり、或日外方より不興なる體にてかへり來りけるが、やがて晝食せずとて膳に向ひ、箸とりあげて見れば、常用の箸とは違ひてありけり、飯を食ひけるに思ひしに違ひていと冷くなりあたりければ、ムシヤクシヤ腹に汁一口に吸ひけるに、舌もやけな半熱きに、例の疝癢玉むらゝと煮へ上り、エツと云ひて、椀も茶碗も膳もあたるに任せてそとに投げつけたり、側にありし此男の姉なる人は、此様を見て、己もまた飯櫃菜臺などありあふものをことごとくに外に投出しければ、弟はこの意外のふるまひに氣を奪はれ、只忙然としてあ

りけるが、やがて姉に向ひ、こはいかなればかく無謀のふるまいや仕玉
ふらんとなじる、姉はいと落付きたる調子にて、さればなり、御身はそ
とにて食事せむとてかくも器物を投出すらむと思ひ慮り、妾はかくも手
傳までなしたるのみと云ひければ、弟は返す言葉も無くてそこを立去り
けり、此姉のいと興ある戒めによりて、この後は弟のはしたなき癖もふ
つと止りけるとなん、



滑稽一口噺

頓智道人編

◎鶴 龜

ある人が、生れたての鶴の雛、龜の子を大事に育て、居るので、ある
人が一體奈何なさるお積りなのですか』と訊くと、その人は『なあに鶴
は千年、龜は万年と言ふから、生きるか、生きないか試して見ようとお
もつてさ。』

◎易 者

大道に店を出して居る易者の前に、悪戯兒が集つて、「この易者は拙劣だから、ちつとも適中らないんだよ」と、冷笑するので、易者は顔を眞赤にして怒つて「仕様のない餓鬼共だ、一體何處の奴等だ」と怒鳴ると、子供等は「易者なら、何處だか當てゝ見ろ。」

◎手足

手と足が互に自慢話の末に、手が言ふには「お前は己より位が下だから、人の中で足を出すと失禮だと言はれるが、氣の毒なことだと言ふと、足は腹を立て、よし／＼そんな悪口を言ふと、糞を踏み附けて、手前に拭かせてやるぞ。」

◎乞食

乞食が自分の子に、手前の様に怠けて居て、いまになに／＼なる積だ。

◎お蔭

貧乏人の女房があてつけがましく、亭主に向つて世間は物騒だ／＼と言ふけれど、家の様に盗られる様なものがないと、結句氣樂で、安心して寝れる』と言ふと、亭主は自慢らしく「これも誰のお蔭だ。」

◎露見

小僧が且那に、内の番頭さんは藝者を連れて、芝居へ行つて居ますよ、と手柄顔に告口すると、且那は額に青筋を立て、何んだと、これは實

に怪しからん話だ、そんな奴は店から出して丁ふ、だが貴様はよく知つて居るな、何處で見た」と言ふと、小僧は迄乎「立見から見ました」主人「コラッ」

◎月 日

お日さまと、お月さまが、下界見物を思ひ立つて一所に出懸けやうとして居ると、やかましやの雷公がやつて来て、是非已れも伴れて行けと達ての頼みに、迷惑なことは思つたが、同じ天界の仲間故断りもならず、つれ立つて行つたは行つたものゝ、とかく話が合はぬので面白くないので、ごうかして雷公をまいて了あふと、二人は甥乎相談して、其晩宿へ

着いてから、雷公がごうくと軒を叩いて寢て居る隙を伺つて、急に手荷物を支度して、亭主を呼んで、勘定書を見ると、お日さまが廿錢、お月さまが六圓と書いてあるので、これは不都合、同じ一ト晩で同じ座敷なのに、ごうしてごうも違ふのかと聴くと、亭主はぬからぬ顔で、日に廿錢なら、月には六圓ですとの理の當然に、お月さまもぐつと詰り、不肖々々に拂ひを済して出立して了ふ、程なく雷公は目を覺し、時計を見ると正午過で、連れの人二人の姿を見えず、手荷物もないのに吃驚して亭主を呼び、お月さまとお日さまはごうした亭はい今朝程早くお立ちになりました、雷公はつくづく嘆息して「ア、月日の立つは早いものだ、

亭「貴殿は何時お立ちになります 雷「俺か、寝後れたから夕立にする。

◎くさみ

放蕩息子が女郎買に行つて、ハクショーと嘘をして「畜生メどこの女が
吾の噂をしやあがると言ふと、花魁が「アレ勿體ないあくたいを言ひな
ます大方お母アさんでせう。

◎一圓紙幣

甲「壹圓紙幣一枚を何枚にもする法があるが、教へてやらうか 乙「それ
は何よりだ、是非教へて貰いたいもんだ 甲「しかし前に一寸断つておく
ことがある 乙「お禮か 甲「イヤサ後で通用ぬ様になるがいゝかといふこ

とよ。

◎おなら

ある口八釜しいおかみさんが、山出しの下女に向つて、おまへは言葉遣
ひを氣をつけなければいけないう、今も聞いて居れば、おならの事を屁
だなんて言つて、これからは屁なんて言はずに、おならとお言ひなさい
よ、と言はれて、下女はへーと返辭しやうとして、氣が付き、ぬからぬ
顔で、おなら畏まりました。

◎信心

ある男が金毘羅様の社の前に跪づいて「私は貧乏が続いて究つて居りま

す、何卒神様の御力を持ちまして、百圓だけお授け下さいまし、その替り百圓の中九十九圓は、私がおなたに鳥居でも、額でも拵えて差上げます、と一生懸命に祈つて居りますと、通りかゝつた朋友が「オイ、百圓貰つて九十九圓遣つちやア、何んにもならないじやねーか」と怒鳴ると、其男は吃驚して、朋友の口へ手を當て「シツ聲が高い、こゝう言はなぐちや神様だつて授けて呉れねーじやねいか。

◎あべこべ

大晦日の夜半に、掛取が遣つて来て、晝の約束だごうか拂つて下さい、亭主「今拂ふが、待つて居て呉れ、外からも持つてくる筈だから 掛

取「だがもう二時過ぎだ、イツそ春になつて來かうか 亭主「イヤ、今夜拂はぬと氣が済まぬ、掛取「イヤもう追つけ夜があける 『亭主「イヤ、今夜拂はねば、内へ歸さぬ 掛取「ごうか歸して、と互に聲高に争つて居ると、傍から女房が「もし貴夫、あの様に頼むのだから、春迄延ばしてお上げなさいよ。

◎接竹

摘木の話が始まつて居る所へ、一人の男がやつて来て、そんなことは朝飯前だ、已は接竹の法を知つて居ると、自慢すると、皆がそれは豪氣だ、教へて呉れないか、よし教へてはやるが、摘いでから持つか持たぬか、

それまでは受合はれないよ。

◎目 惚

酸金で何か食べやうじやないか、と一人が言ふと一人がそれでは、大食も小食のものもあつて、苦情の種だから、一層の事、この中で一番色男が奢る事にしやうじやないか」と言ふので、皆はそれは面白いと賛成したが隅に居た一人が頭を掻いて、それは迷惑だ。

◎目見得

女中が目見得の時、奥様が「お前は先に居た所の奥さんに氣に入つて居たのかい、と聞くと、女中は自慢相に、「ハイ私がお暇を戴いた時、なん

だか大層お喜び遊ばしましたよ。

◎泥 水

下女が奥様に「奥様は何時でもお奇麗ですのに、何故人があんなことを申しますのでせうね」奥様は澄ました顔で、何と言ふの、下女は、泥水あがりと申しますよ。

◎柔 術

柔術に凝つた男が銭湯に行つて、板の間にケルリと這つて轉んだが、痛いのを耐へて起き上つて、こう投げて見たいな。

◎夜 具

借金で首も廻らぬ男、金貸が遣つて来るのをちらと見て、周章で戸棚の中へ隠れると、そこへ金貸が来て「戸棚に隠れてるやうだ」と云ふと、女房は澄ました顔で、戸棚の中は夜具ですよと、辨解をすると、亭主も戸棚の中で「夜具だ夜具だ」

◎重箱の蓋

小僧が使に行つて、重箱の蓋を落して歸ると、旦那は大怒りで「馬鹿めッ、蓋が無くては、是から使用ふ事が出来るもんか」と怒鳴ると、小僧は「左様で御座います、しかし蓋を拾つた方の人は、猶困つて居りませうとすまして居た。」

◎井戸の櫛

伊勢屋の放蕩息子が、色女に遣らうとした櫛を、井戸の中へ落したので「小僧や井戸から櫛を取つて呉れたら、一圓やる」といふ聲を聞いて、親父「イヤ己が取つて遣る」

◎泥棒

貧乏人の家と知らずに這入つた泥棒が、盗む者が無い許りか、夫婦が寒さに顫えて居るので、可哀さうになり、却つて金銭を恵んで遣ると、夫婦は涙を流して大喜びであつたが、賊が二三町ほど行くと、後から「泥棒々々」と叫びながら、亭主が追掛けて来るので、賊は齒軋をして怒つ

て、「ヤイ手前は恩を仇で返す氣か、憎いやつだ」と言ふと亭主は「ツイお名前を存じませんで、泥棒と申しましたのです、實はお泥棒様のお煙草入が落ちて居りましたので、態々御届けに参りました」

◎要心

ある泥棒、貧乏長屋と知らず這入ると、獨り者が寝て居る許りで、何物にもないので、馬鹿々々しいと舌打して、その儘出て行かうとすると、獨り者は蒲團の中から聲を懸けて、「もしく用心がわるいから、戸を締めて行つてお呉れ」

◎墓口

旅へ出て、十錢入の墓口を拾つて、田舎は田舎だけ不自由だ、東京で拾つたら、一圓位は確に這入つて居る」

◎掏摸

掏摸が二人出逢つて「今日は幾ら取つたねと、訊くと、一人が「今向ふから来る人の時計を入れてニツサ。」

◎鯉節

書工の所へ職人が来て、猫と犬と何か木でも書いて下さい」書家は承知して、「犬の方には竹でも書かうが、猫の方は何を書かうか」と云ふと「先生鯉節をお書きなさい」

◎青眼鏡

醫者患者に向つて、大層顔色が悪いよ、患者「眼鏡の何爲でせう、醫者
「ホイ、外すのを忘れた」

◎浪人

浪人が酒に酔拂つて、詩を怒鳴つて歩いて居ると大勢の子供が、ワイフ
いと身體の邊を取り巻いて悪口を言つて囃すので、浪人は腹を立て、
「手前たちは無禮至極の奴だ」と言ひながら、腰の刀を抜き放すと、竹
光であつたので、子供は愈々勢を得て「切れるなら切つて見ろ」と、
云ふと、浪人は負けずに「おのれ片端からどげを立てるぞ」

◎茶粥

主人近所へ話しに往つて居る所へ、下女が掛けて来て「モシ旦那様、茶
がゆが出来ましたから御歸りなさいまし」と言ふので、主人はそこへ
に歸つて下女を呼びつけ「大勢人の居る處で茶粥が出来たなど、氣のき
かない言ひ様だ、今度からは、たとへ茶粥であらふとも、御飯が出来ま
した、おかへりなさいといふものだぞ」とよく教へておいてまた近所へ
話について居る所へ、下女が又来て、キシ旦那様、御飯が出来ました、
おかへりなさいませ」といふと、主人「オ、飯が出来たか、ドレ行つて
覈らふかといつた。

◎長座

いつも来ると長居する客が歸つたあとで、主人は下女に向つて、『今度あの人^{ひる}が来たら、箒^{はうき}に頬^ほかむりさせて、おの人の見^みない所^{ところ}へ立て、おけ』と吩咐^{いひつ}けた、するとつぎの日もその客^{きやく}が来たので、下女^{げぢよ}は此^{こゝ}だと思^{おも}つて、早速^{さつそく}言^いひつけられた通り^{とおり}にこしらへたが、もしや又^{また}ちがつて居^ゐまいかと、客^{きやく}とはなしをして居^ゐる主人^{あるじ}の前^{まへ}へ、かの箒^{はうき}をぬつとさし出^だして、『これでよろしふござりますか』

◎相撲見物

紺屋^{こうや}の職人^{しよくにん}がこぼして言^いふには、斯^かふ毎日^{まいにち}々々^く天氣^{てんき}が續^ついては仕事^{しごと}が急^{いそ}忙^{いそ}しくて、相撲^{すま}見物^{けんぶつ}に行く^いくことが出^で来^きない、雨^{あめ}が降^ふつて呉^くれると善^いいなあ、

◎立食

母親^{はは}が子供^{こども}に、『坊^{ぼう}やお菓子^{くわし}を戸外^{うがいて}で立^たつて食^たべると、阿父^{おとう}さんに叱^{しか}られるよ』と窘^{たじ}めると、子供^{こども}は『そんなら阿父^{おとう}さんの様^{よう}にお鮎^{すし}なら可^いいのかい。』

◎將碁

番頭^{ばんとう}と手代^{てだい}とが將碁^{しやうぎ}を差^さして居^ゐるのを見^みて居^ゐた小僧^{こぞう}が、一人^{ひとり}の小僧^{こぞう}に、『二人^{ふたり}とも大變^{たいへん}下手^{へた}だよ』と言^いふと、一人^{ひとり}の小僧^{こぞう}の言^いふには『それじゃ、

二人とも負けるだらう』

◎晦日留守

借金取りが門の前で遊んで居る子供に向つて『親父さんは家かへど、訊くと、小供は暫く考へて『今日は何日だい』と言ふ、晦日だよ』と返辟すると、小供は『ア、夫れでは居ないよ、晦日は何時でも留守だよ』

◎役者になる

母親が子供に向つて『坊は大きくなつたら、戦死なつた父さん見た様に軍人におなりだらうね』と訊くと、子供は首を振つて『ウウン、坊は阿母さんが一番好きな役者になつてやるよ』

◎私の話

母親『坊や、私の話を爲て居る時に、他から口を出しては不可ませんよ、私の話の済むまでお待ちなさい』子供『だつて、阿母さんは喋舌續けで、いつまで経つても已めないもの』

◎質屋

質屋の子が、近所の子供に向つて『家には澤山に着物があるせ』と自慢を言ふと、鳶の者の忤らしいのが『あつたつてなあ、彼品は隣の叔母さんや家の阿母さんが皆持つて行つてやつたんだい』と威張り返した。

◎女殺

「先生は婦人科専門です」 醫者「左様です」 「先生は實に罪つくりです
ね」 醫者「へへへ、御冗談、いくら手を握つたりしても、私の様な
ものに惚れる婦人はありませんよ」 イーエ、先生の手に掛つて生きた女
がありませんからさ」

◎貧乏大黒

大黒天を日頃信心しても、一向御利益がないので腹を立て、「この貧乏
大黒め、信仰もあきはてたどこでも可いから打捨つて来い」と小僧に吩
附けて出して遣ると、やがて小僧が歸つて来て、且那の仰せの通り、打
捨らうと思ひますと、丁度通り掛つた人が、譲つて呉れないかと申しま

すから、恰度幸と思ひまして、十錢に賣つてまゐりましたと、自慢ら
しく言ふのを聞いて「そんな事だらうと思つた、アノ貧乏大黒め、己の
家を出ると、すぐに人の懐中をいたためやがる」

◎近火

火事は近いぞと言ふので、家財道具を運び出して居ると、一人の男が手
傳に来て、障子だの、畳だのを持ち出して居るのを、其處の女房が見附
けて「そんなものは、大屋のだから打棄つて置きよ、それよりかこれを
さあ」と言つて、鏡臺だの、葛籠だのを差し附けてから、頬冠りの顔を
覗くと、其人は大屋。

◎女學生

母親が娘に向つて、近頃、新聞に大分女學生のふしだらが書いてあるが、お前なんか出されることはあるまいねえ』と心配さうに尋ねると、娘は平氣で『そりや大丈夫なもんよ、私の事なんかは、お朋友さへ知らない位なんですもの』

◎買食

買食ひ好きの母親が、これも賣つて了へ、あれも屑屋に拂つて了へと、氷罎に賣り飛ばすのを始終見て居た腕白が、ある日伯父が來て勝手の悪い雪隠だから、無いのも同然だと吐やく、腕白はこゝだと思つて『それじゃ屑屋に賣ると可いねえ、母親さん』と言つた。

◎くろ

女教師が、白と言ふ字を塗板に書いて、皆さん、この字は何んど讀みますかと、質問したけれど、生徒は、一人も答へるものがない、そこで『私の顔は奈何な色をして居ますか』と言ふと、一人の生徒はすぐと手を舉げて、先生分りました、其字はくろと讀みます。

◎不足税

『何うも甥の奴は金錢を無駄に費つて困るから己の様に金を溜ろと手紙で意見をしてやらう』と長々しく書いて手紙を封筒に入れて、二錢切手

を貼ると、女房が傍から、「モシそれでは不足税になりますよ」と注意すると、ぬからの顔付で、「分つてるよ、この位に儉約をしろと教へて遣るのだ」

◎親泣せ

「汝の様に親泣かせはないぞ、今に見ろ、汝の子が又その通り困らせるから」と言つて聞かせると悴は、「夫れぢや、阿父さんも親を泣かせましたね」

◎出世

車挽が、その子に、早く出世をして、阿父さんを樂にして呉れなくちや

困るよ」と言ふと、その子は「今に官員さんになつて、親爺の車に乗るよ」

◎まじなひづくし

○無盡を當てる呪
真つ直ぐに貼つてあるかし家の札を人知れず取つて持ち行くとあたるといふ（但し人に見つかればからさ目に逢ふべし）

○金持になる呪
大黒のお姿を二千枚摺つて一軒に二まいづゝ配り千軒にくばりしまへば金持になる（但し貧乏大黒ともいふ）

○着もの、出来る咒　大黒の御姿を二枚簞笥の抽出しに入れ置けば着物が殖うると、またよきことあれば一枚は表具し一枚は版に興しそして二千まい印刷して千人に施せばいよくよきことありといふ

○吉凶獨り判断　煙管掃除をした紙撚を煙脂のついたまゝグル〜と三輪にして紙につゝみ之をおひねりのやうに見せかけて往來へ投げ出して置くべし通行人之れを拾ひ取れば吉若し踏みつけられた時は凶と知るべしまた半紙を斜に折り又それを九つにたがひちかひに折り二つに疊んでまん中の處より紙を捲き尾の方に唾をつけて願ひことを唱へながらその紙を天井に投げつける若しそれが天井にはり付くときは凶

の兆である

○遊女が客を招く咒　宛名は記さずとも戀しき御方へ御ぞんじよりと書て四辻に捨おくべし若し拾ふ人あれば願が叶ふ。

○蝮にさゝれたるとき　東山かつらが谷のくろまむし赤まむしチファイの草にとほされて、わらびのおん毒わすれたか南無アピラウンケンと三度唱ふれば、毒が身體にまわらぬといふ

○蜂にさゝれたる時　蜂の虫させばさせ、刺さねばさすなアピラウンケン、と三度となへれば不思議にいたみが去るといふ又蜂にさゝれたるとき直ぐ足下にある石又は瓦を引ッ繰り返せばこれも立ちどころに

疼痛がさるさうである

○蜂にさゝれぬ呪 玉の袖二尺八寸と三度小間にて唱へ又アピラウン

ケンソワカと三度小聲にて稱へ入を入で割ると蜂にさゝれざること奇妙

○喉にトゲの立つたとき 象牙の撥にて喉を逆にさするときはとれる

ものです、また鶉の咽くの三度唱へてもよく飯の塊を鶉呑にしてもよし

○疱瘡の呪 鎮西八郎朝御宿と書いた紙を門口に貼るもよく越前の

國猪尾の峠之茶屋の孫赤子と書いた御符を入口へはるもよく、また小

供の懐中に入れおくもよく、枇杷の葉を二つに折つてその一半と共に

小豆十粒大豆十粒を煎じて飲ませるときに『ごんによごん、ごんによ

ごん』と唱へながら呑むもよしといふ

○狂犬又は犬に吠へられたとき 『われは虎いかになくとも犬は犬、

獅子のはがみを恐れざらめや』と三度となふべしまた『南無といふ六

字をしらの里の犬、そこ退き玉へアピラウンケン』三度となふべし

『ね、いぬ、わ、うし、とら、アピラウンケン』ととなへながら五指

を握る、さもなれば四つ這になつて犬の吠へる真似をすべし

○感冒の呪 『風ひかばあとへもどれよ風の神人なやませて何のくう

かい』と三度口早になへ、そして三度肩を叩くべし

○落馬せぬ呪 手の平へ南といふ字を三回書いて乗るもよく又孔雀の羽を懐中するも好いといふ

○こくら返りたるるとき 木瓜でいたむところを静に撫るべし、また水

泳中などにこぐらの返つたときはとても木瓜など間に合はないから、

かゝるときには口の中にてぼけく〜と三度となへ痛んで引ツ吊るとこ

ろを静に撫るか、南無阿彌陀佛を四十八へん稱へればよいといふ

○船に酔はざる呪 鹽をひとつかみ臍へあて、置くとき酔はぬといふ

○疣を取る呪 白茄子を佛前に供へ置き、その茄子を竹の篋で二ツ切

りとし切り口をもつて疣の上を何べんも〜摩つてその後を元の通り

に合せて縛りつけて、水氣のある地中へ埋むべし但し水氣のない地

は効を奏せぬといふ

○子育ての呪 生れた子にあぐりといふ名を付けるか女子には男の名

をつけまたは男の衣装を着せるか又男の子に女の名をつけ女の服装を

させるもよく、三十三人の子供の布で衣服を拵へて着せるか、神佛の

草履取になる祈願を籠めるか枕元に犬張子を置くもよしといふ

○道樂除けの呪 十才以下の子供の中に白團子九つを拵へて不浄場神

に供へ之れを悉くその子供に食べさせると成長して道樂をせぬといふ

○情夫の心を探る呪

男の寢息を窺つて便所へ行き草履片足を採つて後を見ずに立もどり男の胸の邊をその草履にて撫でながら、言葉をかけてその心中を問ふべし男は夢中に是れに答へるといふ、若しその女に心のないものはその通りに話すと

○自分の行末を知る呪

丑満に四疊半の座敷に一本燈心の燈明皿に燈をつけ、四隅へ鏡を立て、人に見られぬ様に鏡に向へば自分の行末が現はれるといふ

又藝妓娼妓などは八疊の床の間のない座敷を暗くして四隅に鏡を立て順次に廻はつて歩けば其中一つには男の顔が映るといふ

○坊主の來るを知る法

若し湯茶を注ぐとき迂ツかり土瓶または藥罐の尻を向けるときは坊主が來るといふ

○客の奉るを知る

朝茶を注ぐときに茶柱が立てば來客がある

○凍傷の呪

烏瓜へ姓名及び生年月日を記して臺所の荒神さまへ捧げおけば七日の中に癒ゆるといふ

○脚氣の呪

寒の内の丑の日に鬼燈を一つ糠味噌の中に漬けて食ふべし、

絲瓜の生り立の小さきを糠味噌につけ食ふべし

○トダの後をとかめぬ呪

佛壇の燈明の油をつけおけばとがめぬといふ

○田虫の呪 たむし まじない 鬼おにといふ字をかくべしそして黒くろくぬるべし、本所菊川町

の榎えのき稻荷いなぎがある、その榎えのきに飴あめをつけて來ると癒いゆるといふ

○眼病がんびやうの呪 まじない 市ヶ谷いちがや八幡境内の坂さかの中段左側に茶ちやの木稻荷きいなぎの詞ことばがある

眼めの煩わづらひあるものがよく願ねがひをかける七日茶ちや断たして平癒へいゆしたときは幟のぼり一本

奉納ほうなうする正一位茶樹稻荷大明神と唱となへるのである

○夜店よみせにて客きやくなきとき客きやくを招まねく呪 まじない 客きやくなく暇ひまなときには碗豆えんどう又はそら

豆まめを一粒つぶづゝ食くべし、不思議ふしぎに客足きやくあしがつくものである。

○魔まはれの呪 まじない 寝ねるとき夜具やぐの裏うらに龍りゆうといふ字を書かくとおそはれの

○拘かりに遇あはぬ呪 まじない 袂たもとの中なかにて拇指あやうびを握にぎりておくべし

○シビレの切れしとき 人ひとに見みられぬ様やう疊たぐみの塵ちりを取りて額ひたいに當あてるべし

○大風おほかせの時目ときめに塵ちりの入はいらぬ呪 まじない 鼻下びかを三度人さんどの見みぬ處ところにて嘗なめるべし

○蠅除は、よけ 黒胡麻粉くろごまこ一分、砂糖さとう一分、乳酪ぎゆうにやう一分を匙さじを以もつて混合こしごよし板いたの

上うへに煉ねりて室内しやうないに置おくべし

○寝入ねいりたる人ひとに答こたへをなさしむる呪 まじない 鼻はなの心臓しんざうとその脛はざを取りてよく

眠ねた人ひとの胸むねの上うへにおくときは何なにを問とふてもこたへをする

○寝入ねいりたる男女だんなぢよの心中しんちゆうを知るには 鳩はとの心臓しんざうと蛙かえつの脛はざをよく乾かはかし

細末さいまつとして豆大まめだいの圓形えんけいなる石塊せきかと共に汗衫あせかきの中なかに入れ鳩尾みぞをらの窪くぼみたる

ところにおけば過去くわこの事ことは申もうすに及およばず未來みらいになさんとするこゝまで

もいふ

○かけて息の切れぬ

髭人參を含むべし

○難産を平産にする

難産の時には蓮花一片に人といふ字を書いて呑むべし。

○腫れ物を治す呪

患部に拇指を當て『我が手で癒へしおとよごの頼

む』と三度小聲でとなへそれより患者の年を四で割るべし

ごんな腫物

でも治る、また焼豆腐半分をその腫れものへぬり付け竹の皮にて包み

己れの寝る天井裏に釣りてその下に寝るべし

○幾何程あるきても草臥れぬ呪

前夜鹽湯をわかして兩足を浸して翌

日出立すべし

○盗人をあらはす法

その年の年徳神に供へたる昆布をくろ焼にし酒

の中へ入れてうたがわしき人に吞ますべし若し盗人之を吞めば頬がはれる

○畑の作物に虫のつかぬ呪

畑の四方へ馬の爪の切れたのを埋め置くべし

○板に書きし字を消す法

指に鹽をつけてこするべし

○シヤクリを止める法

茶碗へ水を盛りそして箸を十文字の一角より

順に一口づゝ飲むべし

○人を眠らす呪 あをまつば 青松葉を蒸焼にし之を上等の茶にませて飲ますべし

○瘡 をこひひり 男は左、女は右の足のヒラに三灸五灸すゆべし若しそれで落ちぬときは七灸十一灸すゆべし

○疔 た 田ツ貝を丸焼にして炭の如くなる迄焼き將にて煉り疔の頭へ付るべし

○子供の人見知りせぬ呪 おかめが左り褌をとつて居る圖をかいて荒神様におさめ、毎朝水を供へて禮拜するがよろしといふ

○鼻を高くするには 鼻を撮ひべしつまみくすれば高くなる

○小兒の夜泣を止めるには 大津繪の鬼の念佛を買つて來て逆さまに

はりおくべしまた古わらじを我家の屋根の向ふに投るべし (但し人に見られたり人の通るときはいけませぬ)

○墨のねぼるには 耳の垢をとつて入れおくべし

○濕氣にあたらぬやうにするには 生姜を口の中に含みおくべし

○大酒して酔はぬ 干柿を臍にあて、吞むが一ばんよろしい

○天氣を願ふには 摺子木を床の間に飾りその前にて一寸褌を摘み
「何を明日は天氣にして下さい」と口の中にて三べん唱ふべし (但し遊女)

○氣障なお客を歸すには 客に知れぬやう密と簪を逆にしかもじの中

に挿す

○嫌な人を早く歸すには 門口に帚を逆を立て、手拭にて頬冠りをさすべし、又た下駄の裏に灸を据るもよし、藝者は嫌な客だと思ふときは帳場へゆきて『今晚はアリーと』挨拶し左の足から歩み出し階子段を上るにも同様左の足を先に進め座しきに這入るとき、また三足踏みこんで口の中に三遍お迎へくと唱ふべし、それで利かねば火鉢の灰を一寸摘んで嫌な客の背後へ振りかけるべし

○余所の客を自分の家に呼ぶには 人に知れぬ様に流行する家の羽目板へ按摩膏をはるべし若し人目にふるれば無効のみならず悪まれるさ

うた

○虫歯には 半紙に兩足を揃へて圖を書しこれに顔を書き上歯と下歯の數通り書き痛む歯が何枚目になるか數へてそれを柱にはり痛む處の歯へ釘を打つべし、又痛む歯でそら豆をかみ潰すもよしまた六百四十八に患者の年齢を加へてこれをまた八で割りて終の桁に灸を一ツ點へるとよしぎになをる。

○厄おとしには 大晦日に己れの身につくものを人知れず人ごみの中へ落すべし

○藝者のお茶挽とき 火鉢の灰の中へ火鉢で三ヶ所穴を明け心の内に

て『来る』『来ない』『お茶挽』と三の穴を定めて置いて他の者に何の穴でもさして貫ひ若し来る穴にあたればチウ〜三度鼠鳴をする

○よし原揚子 男が朝歸りの折に使ひすてた吉原揚子を密に保存し置き紙にて着物を拵へくら闇の部屋へ逆さに立て、人知れず呪をする若し人に見られたときは無効それだから使つた揚子は折るものである

○金を借りるに融通の付く日取 きのへ(とり、たつ)きのと(み、うし、う、とら)ひのへ(とら、たつ)つちのへ(ね)かのへ(とら、たつ)みづのえ(とら、たつ)みづのと(み)

○萬事成就せざる日 舊曆正月、七月(三日、十一日、十九日、廿七日)

日)二月、八月(二日、十日、十八日、廿六日)三月、九月(一日、九日、十七日、廿五日)四月、十月(四日、十二日、二十日、廿八日)五月、十一月(五日、十三日、廿一日、廿九日)六月、十二月(六日、十四日、廿三日、三十日)

○思ふ女に夢を見させるには 思ふ女の年と姓名と夢に見せやうことを鏡の表に書て其鏡を懐ろに入れ寝るべし必ず先方は鏡に書てある夢を見る

○足止めするには 走り人の年齢を八十四にて割り算盤玉の動かざる様棚の上へ置くべし走り人歸宅せば八十四にてかけて元へ戻すべし

○裁物を間違へぬやうにするには 『津の國のあらきるひすのきぬた

ちて入日もときもきはさりけり』このうたを詠んで仕立物をするとき

きは、まちがひのなき事まことにふしぎなり

○睡眠を防ぐには ムウガの根を手の幅だけに切りこれを尻の下にし

きて座せば終夜眠氣の出ぬことまことにふしぎなり

○はたけ 鋤をもつて耕やすまねを三度すべし又は飯の湯氣を取りて

付けてもよし

○男女を豫知するには 妊娠の年に嬰兒の年一つを加へてこれを三に

てわるべし若しわり切れれば男の子うまるべし又わり切れぬときは女

と知るべし

○間歇熱を全治には 患者の病む日數に一を加へ三度病へに四が目安

とし、四度病へは五を目安とし、二九四七六三八一五をわり最終の五

のありし桁のところを紙よりにて男結びとし算盤玉の動かぬやう（手

のさわらざる處に）置くべし病氣全治りしとき紙よりを解きて川に流

すべし

但し二九四七六三八一五をわりしとき若し間違へれば治らぬもの故

まちがはぬやうになし又算盤玉の動かぬやうにしなければ不可ぬ

まじなひづくし終

滑稽小話

◎十五圓

甲「ヤー芋公何も酒や米や薪やが高くなつて十五圓じや

乙「何が十五圓だこえ

甲「酒が高くて酔ゑん(四圓)さ、米が高くなつて喰ゑん(九圓)さ、薪が高くて煮ゑん(二圓)それを合せて十五圓さア

◎ケチ旦那

吝嗇な人が、自宇では充分炭を買はぬから、火事だといふと、焼跡へ小

僧を遣つて、十能で火を取りに遣りました、或日近所に火事がありました、たから、例の通り「小僧や、火を取つて来い」と云ひ付けますと、小僧はやがて立歸り「火を取りに参りましたらば、先の人が、貴様の所の主人はひどい奴だ、人の家が丸焼になつたのに、近所で居ながら、焚火を取りに来るとは人情のない奴だと、眞つ赤になつて怒りまして、火をくれませぬ」と云へば、吝嗇旦那大立腹「吝嗇な奴だな、覺ゑて居ろ、今度己の家の焼けた時には、火の粉一つもやらないぞ」

◎爺と書工

ある爺書工を雇ふて、竹に虎の書を頼みしに其書工は竹を描くこと能は

ざりしと見え木の上に虎の臥したる様を書きたり、爺はこれを見て何處の國に木の上に虎といふ事があるものかといへば、書工は平氣にて答へて曰く、木のえ虎と云て曆にあるではないかと、後十日目にいたり、書工謝金を促がせしに、爺は僅に二百文を謝禮せり書工腹をたて何程拙な書工でも、十日で二百では困ると云へば、爺平氣にて答へて曰く、二百十日と申して、やはり曆にござるわ、

◎おあい肉

東京にて物を注文する時、其物なき時は『おわいにく』といひて斷るなり、ある田舎者東京見物に來りて、淺草上野と遊び歩きたる後、中食を

認めんと、とある飲食店に登り、婢女を呼て『オイ姉さん、牛肉を持つて來ておくれ』と注文せしに、婢女『それはおあいにくです』といへば、田舎者眞面目にていふやう『そんならそのおあい肉を持て來てくれ』

◎あわてもの

主人、番頭の三助を呼び寄せて『こら三助、明日大至急用があつて京都に行かねばならんから、明日一番汽車で行ておくれ』三『はいと答へしが、元來馬鹿正直の者なりしゆゑ、大至急用といふからは一時間でも早き方がよいと思ひ、俄に支度して停車場に至り、其夜の列車に乗じて京都に向ひたりかくて汽車は七條の停車場に着しければ、三助は急ぎ下

車くるまして、停車場ていしやばの前まへに出いでしが、此時このとき漸やうやく思おもひ出だして『はて、何なんといふ人ひとの所ところへ何用なにようで來たのであつたらうな』

◎父母の恩

父母ふぼの恩おんは山やまよりも高たかく、海うみよりも深こかしとは、よく人の言いふ所ところなれど、これは又また變かはつた譬たとへ方かたなり、

教師きょうし『父母の恩高おんたかきか』

生徒せいと『米の價あたいより高たかし』

教師きょうし『父母の恩深おんふかきか』

生徒せいと『釜かまの底そこより深ふかし』

◎怠惰生徒

一人ひとりの怠惰たいと生徒せいとあり、平常へいぜい十時頃じじょうまで眠ねむり居ゐるを例れいとせしが、或朝あるあさ學校がくかうの朋友ともだち來りて、寢床ねどこに近ちかよりて曰いはく『君きみはまだ寢ねて居ゐるのか、いゝかげんに起おき玉たまへ、もう何時頃なんじじょうだと思おもつて居ゐるか、太陽たいやうはよほど高たかくのぼつたせ』『ア、それは君間違きままちがつて居ゐらあ、太陽たいやうがのぼろうかのぼるまいがそんなことはかまつたものでない、君太陽きみたいやうは夕方りよかたもう六時頃じじょうから引ひき込こむだらう、それでも僕等ぼくらは夜十一時頃よじじょうまで起おきて居ゐるではないか』

◎脾肉の義

生徒せいと『生先脾肉せいせんひにくとは何なんといふ事ことですか』先生せんせい『皮肉ひにくとは他人たにんといふ義ぎです』

生徒「何故ですか」生先「兄弟は骨肉で身内だ」それが皮肉では身の外にあるから他人ではありませんか」生徒「へへへ」

◎親心

東京へ、子を遊學させおける田舎の父あり、其子に、靴を送らんとて、電信の、交通早さを聞き、靴一足を電線にかけたり、通行の人之を見て、靴を盗み、己のはき居る草鞋をかけ行けり、翌日親父行き見て、手を拍つて喜び、「もう先方に着いたものと見えて、古草鞋を戻してよこしたわい、

◎十八里の頭

甲「君、君、僕のお寺の坊さんの頭は十八里あるよ」乙「冗談を云ひ玉ふな、それは風の里數とでもいふ洒落の積りか」甲「いや、何九里九里坊主だからさ、ハハハ、」

◎かへり車

一書生肩を怒らして 書生「おい車屋、何故車を顛覆させて、吾輩を落したのぢや」車屋「だから旦那、かへり車にお召しなさいと、申上げました」

◎煙草

父其子に對ひ 父「これく太郎や、太郎や、煙草とは何うかくかな 子「忘れた」父「何程も書物にあつたぢやないか」と父が云へば「子だつて、

子供が飲むことを禁められたから、もう覚えて居なくつてもよいと思つて」太はすましたもの、

◎怠惰者

田舎親爺出京して息子の下宿屋を尋ねたり、折しも息子は不在にして室内の取り散らしたるさま、目もあてられぬに驚きしか、稍ありて傍の本箱を見返りて嬉しげに、でも忤は感心ぢや、本ばかりは手垢もつけずにあるわい、

◎敦盛の生國

甲「一の谷の軍に熊谷が敦盛を呼びかけて、斯く申す某は武落國の住人熊

谷次郎丹治直實見参々々と云ふから、熊谷の生國は武藏に相違ネーが敦盛何國の生れたらう」乙「知れたこと紀州の生れさ」甲「ナゼ〜」乙「ハチ蜜柑の大夫敦盛と云ふではないか、

◎練べうるゑ

一儒者の家に盗人入る、主人眠覺めて直に盗人を捕へて姓名を詰問す、盗人答へて曰く「私は八兵衛と申します、どうぞお助けなすつて」と手を合す 主人「許しては遣はすが、何故八兵衛と申さぬか、無學な奴ぢやな、シテ其方は何れから忍び入つたか」賊「ハイ恐れ入りましたして御座ります、練べうるゑを越えて這入りました」

◎半弦の月

四五歳の子供半弦の月の水に映ずるを見て叫んで曰く「月が二つに割れて水に落ちたよ、半分は空に残つて居る」と

◎敬の字

一小兒、敬の字を知る、字引を捜る間に驚の字を得たり、小兒驚きて曰く、ヤア手前は馬に乗つて居る、この自轉車の流行つてゐる世の中に、

◎宰予先生

教師習字時間中教場に在つて居眠りす、生徒相指目して互に笑ふ、教師俄に眼を開 教師「余は今汝等の怠惰なるを歎息し、目を閉ぢて考へ居り

しなり」と暫くして又假睡す、生徒之を見て大に笑ひ 生徒「先生余等の不品行を歎せらる能く勉強すべし」と教師却て肅然たり、

◎嘘つき

嘘を吐くに巧みなる人あり、其友某「君は嘘つきの名人なりと聞く、僕にも其種を教へよ」と云ひしに、今日は種本を持たざれば明日持参して見すべしとて、別れたり、其後幾日経ても持ち来らず、某往きて尋ねしに「これぞ君の所望の嘘の初幕で御座います」と云ひたり、

◎詰らない人

甲「オイ空さん、世間の人は皆お前のことを新しい煙管といふせ、何の

ことか知つて居るかい』乙『知つて居なくつてさ、それは乃公を賞めて、
彼の方は何事でも通りが宜い譯の解つた人だといふことさ』甲ハ、ハ、ハ、
なアに、左様ではない、お前は詰らない人だといふことよ』

◎おとなしき子

或日母其子に云ひ聞かして曰く『これ松坊や、お前今日思ひ立つた事は
何でも明日まで延ばすやうでは悪い、即ぐして仕舞はなければいけない
よ』といふに子供『はい、解りました、それでは御母さん、明日下
さるといつた御菓子は今直ぐ頂戴な』

◎小女の智

父娘に向ひ『オイお花や、お前は學問はよく出来るが女は學問ばかりで
はいけない、女の道を一とほり知らなければならぬが、お前に琴が鳴る
かな』娘答へて曰く『さうです、何精神さへ一到すれば鳴らないことは
ありません、昔の人の金言に精神一到何琴か鳴らざらんと云ふではあり
ませぬか』

◎田舎者

或田舎者足袋屋に行き『御免なはれ、どうぞ足袋を一足お願い申しやす』
主人『はい、貴方は九文で御座いますかな』田舎者眞面目になり『いや
いや私は田舎もんでがす、』

◎昔の武者

子「お父さん、お父さん、昔の武者は大きかつたと見えますね」父「何今の
人と格別違ひはないさ」子「それでも、城を枕に討死したと、此本に書い
てありますもの」



大才 大石内藏之助の頓智

一 命懸けのお薬

花は櫻に人は武士、その又武士の中なる武士の精華と、人に唄はれた赤
穂義臣の棟梁、大石内藏之助良雄と言へば、恐らく三歳の童女と雖、其
名を知らぬ者のない程の人物である、其人の豪傑事や忠義振り等を、彼
是言たり著たりするのは、宛然氷は冷たい火は熱いと言ふのと同じだが
世間に未だ澤山知れて居らぬ、渠れ良雄が大才頓智の概畧の、變つた面

白い事蹟の二三を御紹介をすらならば、未だ良雄が内藏之助とならぬ幼少時代、大人も及ばぬ頗る振つた事實がある、夫は良雄が久馬と稱して未だ大石家へ養子に行かぬ以前のお嘶である、元來内藏之助と言ふ大人物は、播州人ぢやない備前の生れ、池田侯の家老池田玄蕃と言ふ人の子で、久馬と呼ばれ、主公新太郎少將君のお傍へ、お小性勤めで十二三歳の頃から、毎日御殿へ御奉公に上つて居つたが、小供でこそあれ屢々大人の家來共が、舌を捲て愕く様に、凡人とは變つた賢い兒でありました夫故主公も大層御寵愛遊ばされ、少の間もお傍を離れませんが、父君池田玄蕃も未頼母しく、非常に可愛がりましたが、或時斯云ふ事が勃りました

た、主公新太郎少將君は、英邁の性質でありながら、若年時代は非常な我儘で、癪癪が強かつたので、並大抵のお附の家來共では、御氣嫌が取れなかつたのに、加之近來憂鬱症と言ふ病が発生り、一層御氣嫌を取るのが六ヶ敷なつたので、近臣の面々は大弱りに閉口、また夫ばかりぢやない、如何にお勧め申上げてても、一向お薬を召上らないので、病は重るばかりで日に日に、御身體は衰弱するばかり、家中一同の心痛は並大抵ではない、萬一主公が御病氣の爲め、大切のお命を殞す様な事があつては、池田家には未だ定る御相續人が決定居らぬのに、主公が御逝去遊ばせば、當時の天下の御定法として、池田の御家は斷絶されて終ふので

非常に心配して種々に誰が何とお勧めをしても、断じて服薬はしない、
是は畢竟病の爲でもありませんが、一は或る深い理由があつての事であ
りました、久馬は此事で少からず心を痛め、何とかして主公にお薬を差
上たいと勤考の末、遂に一の工夫を考へ出し、莞爾くしながら重役方
の詰所へ來まして、私が必ず主公にお薬を差上げるから、此大役を命じ
て呉れぬかと申入れた、重役の面々も、平素から圖抜けた伶俐の久馬で
はあるが、家老番頭等の歴々の武士方がお勸をして、御聞入がないのに
何で久馬如き小童がと、一時は輕蔑して相談相手にも致しませんでした
が、久馬が熱心に頼み入れますので、夫なら如何して御服薬をお勧めす

るかたとたづねますと、久馬は是々斯々の計畧を以て、必ずお薬を差上る
と詳細に、久馬の胸に浮んだ仕組を申述べますと、一同の重役は其大才
頓智の奇抜妙計に、舌を捲て感歎し直に此大役を、久馬に命じたのであ
つた、开も此計畧とは如何なる事であらふか!!!
久馬は主公新太郎少將の君の御前に何候をして、何氣なき體に種々の武
藝のお咄や學問の嘸なぞ致して、一向御病氣の事やお薬の事なぞは、口
へも出しませんで頻に御氣嫌を伺ふので、主公も御氣に適ひし久馬の事
であるから快よく、御物語をなされて居ると、久馬は唐突に
「主公少々御伺ひが致したい儀が、御座りますか主公には、御存で居ら

せられませうか、御伺ひ致しても苦うムりませぬか

随分無禮な申方だ、普通の近臣が斯な事を言へば、新太郎君は無禮者と
大喝一聲、御佩刀の柄に手の掛るのだが、久馬だけに御立服はされたが
未だ荒々しくはならぬ

「貴様如き者の糺る事、余の知らざる筈はない、何ぢや申せ

「早速御伺ひ致したきは、忠孝の二字は如何なる意味でござりますか

「呆氣奴………忠孝の二字が、貴様は知らんのか、夫とも余を愚弄致す
のか、確と返答せへ、答の次第に因りては、容赦ならんぞ

「主君には怪しかりませぬ仰せにムります、久馬が知らぬければこそ、

御伺仕りましたので決して大叛た、御主君を蔑に致す可き筈ござり
ませぬ

「夫が愚弄ぢや、誠汝が、忠孝の二字如きを知らざる筈なし、假し又、
誠知らぬならば、大呆氣ぢや

「貴命の如く、實は満更知らぬ譯もムりませぬが、拙者が習ひ覺えます
る忠孝とは、譬へ我が身體なりと雖、粗末に致すは上は天子將軍に對し
下は祖先御家に對し、不忠不孝の極と存じますが、主公の近來の御振
舞は久馬の心得居ります、忠孝の行ひ更らにムりませぬ、夫故主公の御
存の忠孝と、久馬の忠孝とは、相違の次第を伺つたる次第

久馬の言葉が終らぬ中に、主君新太郎君の立腹は其頂點に達した、見る／＼に蒼ざめたる面色は、上氣の爲め朱をそゞぎ、眼光血走り、遵菜程の青筋が五六本額に現れ

「不屈者奴ツ……………」

と大喝一聲、立上りざま傍の佩刀を左手に握み、屹と久馬を白眼んだが未だ眞底から眞二つとまでには思はなかつたらしいが、久馬は平氣の平左恐れ氣もなく、腮を突出し極て無禮の態度で

「主君、此久馬をお手打に遊ばすのですか、其御身體では壯健な身體を持つて居る、此久馬は到底も一寸でも五分でも斬る事は出来ませぬ……………」

……夫とも其御病體で生た人間が斬ますか、斬たくばお壯健にお成り遊ばせ……………」

と口を極めて諷刺的に罵つた、主君は最早憤怒の極點に達し、恰ら夢中に佩刀の鞘拂に及ぶと同時に、病軀も忘れ無二無三に久馬を望んで斬下して來るのを、久馬は彼方此方と輕々しく身を反し

「サアお斬り遊ばせ、早くお手打になされ

と擲擲ながら逃げ廻るので、益々怒つて主公は久馬を追廻すけれど、早足の久馬の事なり、此方は病人なり大名の主君、足の早かる可き譯はない、容易に捕へる事も斬る事も出来ないで、今はせつ／＼と息をいづ

ませ

「誰かあるく、早く久馬を捕へよ」

と劇しく呼立てますが誰一人として、豫ねて久馬から重役へ打合せてあるのだから、誰一人として何處へ潜み何れへ隠れたか、出で來つて久馬を捕へる武士はない、主公は愈々癩癪は込あける、呼吸は迫る、足元も蹠跟くしながら長廊下まで、久馬を追蹤して來つたが、思はず挫と尻餅を搗き、我と我が胸を拳で叩きながら、呼吸が迫り、咽喉が渴き如何とも耐へられず、最早再び起ち上ると言ふ勇氣も失せ

「おれ……白湯を持って誰ぞあらぬか」

と然も苦氣に叫ばれると、此時何時の間にか傍の衝立の蔭から、茶坊主の春齋が、お湯呑に充々とお煎薬を汲んで、主公に差上げた、主公は久馬の企らんだ事とは知らぬから、湯呑を手に觸れると其儘、息をもつかず咽喉の渴きに耐へ難ぬるまゝ、二口三口に大半を飲干し、漸く乾きが癒ゆると、白湯ならざる事が初めて氣がつき

「コレ坊主……白湯と申つけしに、何故斯様な物を持參した、コレは如何やら藥湯の様ぢやが……」

「へい、仰の如く藥湯にムります」

と答へると同時に、一旦逃げ隠れて居りました久馬は、突然其場へ立現

れ、主公の御面前へ平伏し

『斯く御薬を召飲りし上は、最早久馬の御奉公の萬分一を仕遂げましたる次第、イザ此上は只今までの御無禮を働きたる、罪科に因て速に御手打なり打首なり如何様共、御成敗を仰ぎ奉ります……』

と恐れ氣もなく、今までの企みの次第を申述べましたのを、主公は逐一聞終りますと、尋常の勧誘では到底自分が服薬せぬ處から、久馬は己の一命を犠牲に供へて服薬せした、其忠義の志と、時に臨んでの頓智に感服し、久馬の無禮過言を咎める處か反つて御賞美あり、其後は服薬に及ばれたので、日ならず病氣は本復に及ばれた。

二 三寸の舌數多の劔客を伏す

播州赤穂の城主、淺野内匠頭の城代家老、大石頼母が近來備前の池田侯の家老、池田玄蕃から一子を貰ひ受け、養子とした内藏之助良雄こそは例の神童と稱せられた池田久馬である、併し大才は愚なるが如しの諺にもれず、家中に於ける内藏之助の評判は餘りに宜敷ない、晝行燈と言ふ有難からの綽名さへつけられた、此ばんやり人物も見るの明ある人の眼には、又見處が異ふ容易ならざる大役の御令が、内藏之助良雄の頭上にくつた。

此大役とは當時天下に雷名を轟かした、軍學者山鹿甚五左衛門素行と言

ふ人、幕府の忌とてろとなり、淺野家へ預人となつた、淺野家は山鹿先生を江戸の藩邸には置けぬ、本國赤穂へ護送しなければならぬ、外面から鳥渡考へれば、別段六ヶ敷い役でもない様だが、山鹿先生の門弟には劍術の先生もあれば、槍の先生もある、荒々しき武藝者もある、總じて山鹿の門生は約一千に近い、夫故短氣輕卒の、血氣に焦る門生の數多は幕府の處置に大平を抱き、是亦共護送の途中を要撃して、先生を奪ひ取らんと云ふ計畫のある事の風説が高い、夫故淺野家の心配は非常な理で、幕府の預人を途中で奪はれる様な事があつては、家に關はる大事だ爾かと言つて戦争に出掛る様に、仰々しき大人數で道中をさせる事は、

天下の定法としても許さない、又餘り世間に對しても臆病じみる、开處で護送の任に當る人撰が困難であつた、腕ばかり剛く武藝が出来ても、智慧の足らぬ人や膽力の据らぬ者では、到底此役は仕果せぬ、家中を撰りに撰つて主公の眼識に適つたは良雄であつた、家中一般は其意外に呆れ勘からず、淺野家の前途を憂へた。

内藏之助良雄は、胸に的確の成算が初めからあつたのか、勇ましく喜びつゝ、僅に副役の近藤某を合せ、同勢仲間小奴を混ぜ二十人に足らぬ小勢で江戸を出發した。

大切の預人山鹿素行の乗物を擁して、品川川崎神奈川と、順次路を急ぎ

て、程ヶ谷戸塚も過ぎ何事もなく、關東名代の難所、函嶺の麓まで来た
サア愈々危険は近づいて来た、必ず函嶺の山中で要撃されるものと、副
役の近藤は元より一同生たる心持なく、皆ブル／＼顛へて居る中に、獨
り内藏之助のみは平氣の平左、平素に變らず一同を慰めるので、副役近
藤は内藏之助に向ひ

「貴殿は此容易ならざる、御役を引受け居るにも關はらず、少も御心配
無之は如何の次第か承りたい

「成程大切の御役には相違ござらぬが、萬事は拙者の胸中にござる、然
して御心配の事もござらぬ、萬一間違つたとて我々の一命を殞せば事は

落着申すよ、ハア、ハ、

斯云風の呑氣至極で相手にならぬから、近藤の心配は非常であつたが、
最初江戸出發の時、何事でも内藏之助の命令に従ふ事、又決して彼是自
分の意見を用ゆる事を禁じられて居るから、凡て内藏之助任せで、覺束
なくも恐々ながら、函嶺の山越も濟んだが、幸ひにも無事であつたので
一安心をしたは束の間で、沼津と三島の松並木へ差懸つた時、果して大
勢の山鹿の門生數十人各自武装をして立現れ、山鹿先生を奪ふとしたが
内藏之助の頓智の働きは爰だ、怒じ抵抗して防だとして敵し得られない、
徒らに一同が斬死をするだけだ、开處で内藏之助は雄辨を振ひ、門生を

説きつけ其心を和らげたのは、山鹿先生の傍に自分の身體を密接さし、内藏之助の言ふ事を承知しなければ、山鹿を刺殺し自分の一命をも失ふ旨を、口へ出しては言はなつたが、其舉動で悟らしめ無事に爰を通過したは大なる頓智である。

三 十八ヶ條の申開き

大石内藏之助良雄が、淺野内匠頭長矩に對する忠義の大功は、山鹿先生を無事に赤穂の城へ護送したのを手始めに、備中松山城の城受取り其他枚舉に違あらざる程である、皆功績の源因は彼の頓智の致す處であつた然は去りながら不幸にも主公内匠頭長矩、殿中に刃傷をなし家は絶斷に

及ばれ、其怨敵吉良上野之介義央を討つて、主公の怨を霽らすべく、四十七士の黨を組み辛酸艱苦をなむるに及んだ。

一ヶ年と十ヶ月の長日月、種々の障礙 闘ひ終に元祿十五年極月中の四日、首尾よく本所松坂町の吉良邸の表裏兩門より、同志四十七人と共に亂入し、怨敵吉良上野之助の首級を打落し、高輪泉岳寺へ引揚げ、後ら幕府の命令に因り四十七人の義士は、四家の大名に分預せられる事になつた。

内藏之助は、細川越中守に同志十七人と共に預けられる事になつた、幕府は容易ならざる事件であるから、慎重なる取調べをするべく、當時の

老中月番小笠原佐渡守に専任取調べを命じた。

警討のあつた其翌年即ち元禄十六年一月末に及んで、佐渡守役宅に於て四十七人の巨魁大石内藏之助を、細川の邸より召喚し訊問に及ばれた箇條は、總計で十八ヶ條であつた。

此十八ヶ條と言ふは、義士方に對しては容易ならぬ箇條で、此中一箇條たりとも疏明が立ぬ時は、天下のお膝元を騒がせし咎は免れぬのみか、延て御本家淺野藝州侯の御家にも幾分かの迷惑が及ばすのである。然れば内藏之助の答辨は、實に重大責任が其舌端に關つて居る、今其十八ヶ條の中の難問二三を列記すれば。

一 吉良上野之介の表門を破壊したる事

二 大勢徒黨を組みたる事

三 吉良の門前附近に拔身の槍を携へたる黒装束の者共は何者なるか
明白に申立る事

四 弓矢の飛道具を用ひたる事

此四ヶ條か最も六つヶ敷い訊問である、何となれば第一問の表門破壊と言ふは大切なる問題で、昔は大名の門を破壊する者は事の善惡に關らず重罪に處せらる規定がある、併し實際に於ては大高源吾が木槌で破壊したのであつたを、内藏之助の快辨で吉良方の者が、義士を防禦の爲めに

投げつけたる、大石が門扉に當つて壊れた事に疏明を立て、第二間の徒黨云々は誠に困つた、併し豫め此事あるを知つて居た、内藏之助の事ゆへ四十七人の住所が、各自異つて居たのと三人一組にしてあつた、符號を證にして決して多人數の徒黨でない、偶然にも心を同ふする者共が、十四日の夜に落合つたのは、内匠頭の忌日が十四日である處から期せずして十四日に事を擧げたのであると、辛くも辨解を遂げた、第三間はなかく六ヶ敷い、事實は義士を影ながら應援せんと本家藝州侯の藩士や其他の義俠ある武士等が多人數で松坂町附近より、兩國橋畔までを警戒し吉良の屋敷より、逃れ出で本家上杉家へ注進の者を喰止め、又上杉よ

り押寄せ來らば之を追ひ散らさんと、拔身の槍を携へて雪中を徘徊して居たのであつた、然れば此事は絶對に否認をして置ねば、他人に迷惑を及ぼすので極力抗辯したが、佐渡守は確に吉良の家臣が認めたと云ふが如何との、證言を楯に突込みし時、内藏之助は斯頓智の辯を振つた
『其夜は寒氣厳しく、雪降りの夜なりし故、軒端く大なる氷柱が下つて居たり、然れば主人の大事に逃げ廻り居る如き、臆病武士の吉良家の家來、氷柱を拔身の槍と多分見損じたるならんと洒々落々の頓智辯に係の佐渡守も感心に及ばれ、其儘第三間をも通過せしめた、第四間の飛道具の訊問は、定めし内藏之助も因るであらふ、

實際半弓を劇しく亂射したのである。飛道具を將軍お膝元に用ゆるは、其罪輕からざる罪科である、如何に答辯するやと、片唾を吞んで並居る列座の老中若年寄等の役人輩は、元來内藏之助方に同情心充分であるから、尠からず心痛をして居たが、案ずる程でもなく内藏之助は「決して飛道具は用ひない、开も飛道具として平常士民が猥りに用ゆる可からざる、天下の法度の武器は弓矢鐵砲である、然るに内藏之助等が用ひたる品は、小供の玩弄品同様の弓矢である、其證據は鏃が抜てある矢を用ひてある、开は押収に係る、吉良家より差出した、矢を檢査すれば一目瞭然である

と水の流るゝ如きの答をなし、其他の十四ヶ條は言ふまでもなく、頓智頓才の續發に調方をして舌を捲かしためたのは、實に稀世の英傑である。

四 悪物語りに一藩を泣かしむ

吉良上野之介を討ちしは、満天下舉つて義士に同情を寄せ、就中細川越中守は、祈願所芝愛宕山の神社に、義士の無罪を祈つた程であるから、細川家がお預けに關る、内藏之助を始め十七人に對する、待遇は極めて丁寧であつた、幕府が義士の取調べも、追々抄取り近き中に事件の解決を見るべく差迫り來つた、細川家は手を廻し、其裁決の模様を探ると大抵九分九厘までは、切腹との事が判然たので、細川侯は非常に悲み落膽

に及ばれ、せめては心を盡した、御馳走を致して置かふと、諸士の切腹は元祿十六年の二月四日であつたが、其以前の事で鶴の吸物と言ふ大名でさへ、其當時は滅多に口にする事の出来ぬ、大馳走を振舞はれた、言ふまでもなく池田伊丹の醇酒を出した、酒好の人は義士中に多い、殊に有名の大酒家、堀部安兵衛は、松平隠岐守へお預で、生憎く此席に列する事が出来なかつたが、赤垣源藏は當家へ預けられた一人、無論此酒席に列なつて、ガブリ／＼と心の行くまで、大杯を傾けて居る、如何に大酒家でも多量の飲酒に、少く源藏姿勢を亂し、何となく失態をも仕難ねまじく見えだが、列座の者は勿論内藏之助さへ場所柄として、源藏を叱り

戒める事が出来ない、爾かと言つて放擲て置けば、酒飲の僻として如何な醜態を演出するか、甚だ心許ないので流石は内藏之助だ、即座に例の大才頓智が胸に浮んだので、一同に對ひ

「斯る酒席の場合には不適當であるが、實は昨夜奇態なる夢を見たに就て、お物語りを致さう……と面白想に冒頭を置いて、語り出した其夢物語りと言ふは内藏之助が、但ある廣い／＼野原に遊んで居ると、行くとなしに森や林を過ぎ山を越え谷を涉り、思はず數十里も歩んだと覺敷頃、壯嚴な高潔いある墓があるので、何氣なく墓石に刻であるのを讀むと、朝散太夫吹毛玄利大居士と主公の法號が刻であつたので、潑と思つ

て平伏するとアラ不思議、御主君、内匠頭様の御姿歴々と現れ給ひ内藏之助と、御言葉を下されたので、早速上野之介を討ち奉りし旨の、委細を言上に及び、定めて主公には御満足と思ひの外、御機嫌美しからず仇を報せしは過分である、併し何故仇討を致したら、一刻も早く余の傍に來らざる、假し天下の御法に搦れ、來る事延引に及ぶとあらば、是非なしとするも黨中の或者は、酒食を擅に致す輩もある様だが、甚だ余の不满に思ふ處である、と仰せがありしと思へば夢は醒め、實に思はず背に冷汗を流した……と元より作り事であるが、源藏の暴飲を諷刺した源藏は此夢物語を聞き終り、朱の如き面色は乍ち蒼ざめ、身を顛はし、

其處に平伏し今までの酔は醒め果て、只管ら内藏之助に其不謹慎なる態度を詫びたのは、忠義鐵石の如き源藏の事ゆへ、然もある可き事だが、巧みに亡き主公の御名を用ひて、諷刺した内藏之助の頓智も、實に愕くの外あるまい。

大臨機 大石内藏之助の頓智 終

臨機 裁判 大岡越前守の頓智

一 名奉行越前の活眼乍にして實親を發見す

太閤は秀吉に限るが如く、黄門は光圀の専有名詞となつた如く、古來名奉行名法官も澤山である、何も名奉行は獨り大岡越前守のみならんやだ然し名奉行と言へば大岡越前守忠相を直に聯想する程の、智惠者である頓智に富んだ大人物であつたは相違ない、爰に數ある大岡政談中、最も滑稽にして趣味ある珍妙の頓智裁判二つ三つを、紹介して讀者の臆を解

かしめやう。

越前守と任官して江戸南町奉行となつた、三四年前正徳年間の事件であつた、伊勢の山田の奉行を勤役中、大岡忠左衛門と呼んだ頃のお断である。

山田近在の杉本五左衛門と言ふ者と無苗字五左衛門と呼同名異人の兩人が、お菊と名乗れる七歳の容貌誠に美しく、愛嬌溢るゝ幼児を召伴れ訴へ出でし其趣きを聞くに、農民五左衛門が所用あつて山田の町を通行の際、路傍に於て多くの悪戯盛の男の子等が寄り集つて、一人の可愛らしい女の子を苛酷て居るので、男の子供等を追散し介り遣はし、熟くく

有繫の名奉行大岡越州公も、此裁判には烏渡孰れが真か虚か、判断が就き難るのは肝腎の證據となる可き、迷子札には單だ五左衛門とばかり記して、其住所身分がないから兩人の五左衛門が、互に自分の付たと言張るのだ、これは言ふまでもなく一方は無論詐りには違ひないが、何を以て其實否を確かめやうと、例の越州公は頓智を活躍せしめた、二人五左衛門は、兎に角白洲へ呼び入れられ砂利の上に座らせ、奉行大岡忠右衛門は出役に及ばれ、嚴なる口調にて

「杉本新田、名主五左衛門、面を上い

「へい〜……………」

其女兒の顔を見れば先年故あつて離別した女房が、五左衛門の不承知なるを無理から盗み出して、何方へか伴ひ行きたる最愛の娘お菊である事が判つたので、伴ひて我家に歸らんとした時小影から、立現れた杉本新田の名主杉本五左衛門が、お菊を伴ひ行を拒んで此女兒は自分が、三年前に迷兒として捜索中の大切な一人娘である、其證據は幼兒の腰につけたる、巾着の迷子札に歴々と、五左衛門娘菊、寶永六己丑年八月十日生と記してあるのが、確なる證據だと主張つて居る、然し一方の五左衛門も此迷子札は自己の名前を刻つけたのだ、決して杉本新田の五左衛門のではないと申立をして居る。

と言ながら恐るゝ顔を擡げたは、年頃五十五六の赫面の肥満した、眼の窪んだ人相の餘り好まない老爺である

「田丸村農民、五左衛門とは其方なるか、面を上げい

「ハイ」

と是又恐るゝに顔を擡げた、見るから朴訥らしき五十合好の、服装賤しき水吞百姓

面を擡げさした二人五左衛門の、人相を熟々眺めて居た、大岡越州公は大略其善惡是非の見極めはついた、然し何を以て其一方を伏罪させやうと御勘考の末

「杉本村五左衛門確と此菊と申す、幼兒は其方の子に相違ないか
「仰の如く確と相違ございませぬ

「然らば其方の兒だと言ふ、他に動かす事の出来ない確な證據があるか
「御座りますともく、此兒の腰に附着てあります、迷子札が確の證據
であります

「コソヤ五左衛門、迷子札のみでは、確たる證據とは申されぬぞ
「夫は又不思議な譯、如何なる儀で左様仰せになりますか

「少も不思議はない筈、五左衛門の名は其方一人に限られた譯ではある
まい、現に相手方も五左衛門と申ではないか、开して迷子札を以て證據

と致して居る迷子札のみでは、證據とは相成らん

「夫なら證人が御座ります

「證人……シテ又其證人とは如何なる者で如何云ふ證據を差出す

「私村方のお虎婆と申す、産婆で現に此お菊を取上げましたもので

「成程、夫は好き證人ぢや、然し其方の妻は八年前に死去せし由である
が、此儀は如何に

「能く御存じで、夫に相違ムりませぬ

「然らば妻の生んだ兒ではないのだナ

「ハイ仰の如くで

『何者に生じた』

『妾に生ませました』

『其女を呼出して取調ぶるが、差支へあるまい』

『其女は當時何處に居りますか一向相分りませぬ……然しお虎婆だけで充分ではムりませぬか』

『黙れ！ 充分か充分ならざるかは、奉行の眼識にある、其方等が申す處はないぞ』

『ハイ、恐れ入りました』

『コレ田丸村相手方五左衛門、其方離別致した女房竹が、是なる菊を其』

方の不在の折柄盗み出したと申が確と左様か、夫に就ては何ぞ證據になるべき品か、證人でもあらざるか』

『ハイ證據と申しましては、此迷子札の外はござりませぬへし、證人と申しましては私が貧乏人の事ゆへ、入費を出してやる事が出来ませぬへので知つて居る者も知んねへ〜と申て、關係つて損をするのを恐ろしがつて、誰一人證人に立つて呉れませぬへ』

『左様か……夫は氣の毒である』

と大岡公は仰せられ、腕を拱きたは、確に夫と目星は就て居たらしい、
開處で一策を案じ

「コレ兩人承はれ、兩五左衛門の申條、證據薄弱にて、双方共孰れが實親か相分り難ぬる、夫ゆへ斯く致せ、奉行面前に於て菊女の左右の兩腕を、兩五左衛門にて握り互に引き合ひ、勝ちたる方を實の親と決むべしと奇妙な裁判の宣告をした、そこで判決に従ひ、奉行所手附の同心方は二人の五左衛門を右と左に立せ、中央にお菊を立せ、細根大根の様な、可愛らしい細き腕を兩五左衛門に握らせた、凡ての準備の整ふを見て越州公は屹と兩人の一舉一動に眼をつけ

「兩人相互に敗けるナツ、夫れ引き合へ

と號令を下した兩五左衛門は、必死の力を出し、全力を腕に籠め、エイ

く聲して引き合を始めたから、何かは以て七歳の幼児が耐へ得られものでない、腕は抜くるばかりの痛みに耐へず、ヒツヒツと悲鳴苦痛の叫びをなして、悶へる有様傍に見る、者誰一人として、奉行大岡越州公の、此白痴ノ、しき亂暴なる裁判振に、呆れかへつてたゞ幼児憐れと、涙を漏す者さへあつた

稍ありて田丸村百姓、五左衛門はお菊の手を放し、奉行の面前に泣伏したので、杉本新田五左衛門は得々として奉行に對ひ

「有難う存じます、首尾よく私が勝ちました、サア此兒は私が伴れ歸ります

と速々と手を牽張り拉し行かふとするを

「俟てツ、未だ奉行は連れ行けとは申さぬ、コレ田丸村五左衛門、何故其方は杉本村五左衛門より遙かに、膂力は優れて居る様ぢやに引合ひ最中も、屢々敗をとる風情も相見え、且つは中途に引合ふ手を放ち、俄に泣伏したる其方の心中を語れ

「語れと仰つて、夫りや御無理でござへます、私が眞誠の力を出して、引張りや此兒の腕は抜て仕舞ふだ、私可哀想で如何にしても引張れねへでがすが、私の子に違ねへでがすが、杉本村の五左衛門に奪れる様なら私死んで終ふのでがす

左衛門に引渡しになつた

事滑稽に似て居れど深く考れば、大岡の頓智は到底凡人の及ばない處であらふ。

二 強慾大屋の懲戒裁判大工調べ

此裁判は大岡忠右衛門が越前守と、任官して江戸南の町奉行勤役中の出来事である。

神田白壁町に、大工の熊藏と言ふ者があつた、此熊藏の大屋の爺と言ふは、界限誰知らぬ者なき慾張頑固の凸凹爺の吝嗇坊であつた、此大工熊藏は腕は一人前秀れては居るが、危介多である處から年中ビイ〜貧乏

して居る、一時十日間ばかり煩つて稼業を休んだ爲め、家賃が停滯つたのが凶のつき始しで、其後は不幸が續き通しで月に二朱の家賃が、八ヶ月程一兩余り溜つたから、サア慾張大屋は沈静としては、到底居られない或日熊藏の家へ怒鳴込んで来て、熊藏の稼業道具は鐵槌鉋丁斧は勿論一式を持歸つて終つたので、熊藏は仕事があつても稼業に出られず、ほと／＼大弱りに弱つて種々仲裁人を頼んで、家主に示談を申入れたが八ヶ月の店錢一兩が、びた錢一文半片欠ても道具は渡さぬと、力味で居るのは稼業を仕なければ喰へず、稼業をするには道具は是非要る、如何な工夫をしても譬へ鳩アを賣つても拵へて來ると、足元を見込での強慾に仲

「仔細相分つた……心配致すな、此幼兒菊は其方に相渡す、確に田丸村の五左衛門娘に相違ない……杉本村五左衛門は不埒な奴ぢや、夫れ繩打て……」

事の意外に一同も愕いたが、杉本五左衛門は驚愕と恐怖憤怒に充てる、顔へ聲で

「何で私に繩打つた、名奉行だの智慧奉行だのと評判のあるにも、似合ねへ邪曲非道の役人だ、何で斯な依枯最負の裁判さつしやる

「黙れ！ 五左衛門能く承はれ、汝等兩人の訴へ出し時より、其大略は推察して居つた此奉行、ナレドモ猶も確めんと、腕づくにて菊女の奪合

ひをなさしむるに及んで、明白に其方は實親ならざる事分明致した、其故、如何となれば、血肉を分てる我子であれば、腕を引かれ苦痛の様を見なば、自と膂力は抜けべき筈、現に實親田丸村五左衛門を見よ、譬へ汝に敗くるとも、菊の苦痛を見るに忍びず、其手を放せしに非ずや、然るに汝は菊の腕千斷る苦痛も察せず、たゞ我意を押通すに、熱中して居るに非ずや、斯る事は到底肉親の父としては、忍び行ふ事出来ざる道理ぢや、斯く申す奉行大岡忠右衛門の、眼識が違ふか如何じや……………と懇々と説き嚴重なる詰問に終に、剛情我慢の杉本五左衛門も、お菊を横取りしやうとした、悪事の顛末を白狀に及んだので、お菊は田丸村五

裁者も手を引いた、尤も一兩位の事だから熊藏の親方は出してやる心も満更なかつた譯でもなかつたが、意氣張上言葉の行懸りから終に大工道具取戻の、お訴へを南町奉行所にするに及んだのだ。

お調べの係は、大岡越前守忠相公である、訴人、相手方附添人等夫々白洲へ呼入れ、各自を砂利の上へ座らせ、嚴かなる取調べを開始した。

「訴へ人、神田白壁町平兵衛店、大工熊藏……………附添人大工棟梁三五郎面を上い……………其方は家主平兵衛の爲めに、店賃一兩の借銭の擔保に、稼業道具一式を取上げられ甚だ難澁の旨申出で、道具取戻を訴へに及んだのだ

「ハイ、左様にムります」

「家主平兵衛……其方は一兩の店錢の擔保に大工道具を取上げたに相違ないか」

「取上げましたに相違ござりませぬ、店錢を支拂はないから取上げたのは當然でございます、家主が店を貸して、店錢を請求のは何も不思議はございませぬ」

「コレ、ツペコベ喋舌な、家主は店賃を請求するのは、何も悪いとは申さぬ、平兵衛は店賃さへ受取れば宜敷いのぢやな」

「左様でござります、店賃さへ先方で拂へば何も別に異議はありませぬ」

「然らば大工熊藏、即座に店錢一兩を平兵衛に支拂へ、而して支拂ひたる上は、其方が道具を取上げられ、稼業休みとなつた。其間の手間錢は平兵衛から受取れ」

「ハイ、」

「序であるから、平兵衛に支拂はせる其手間錢も、奉行が決定て遣はす……コレ附添人大工棟梁三五郎……其方は是なる熊藏を年中使役て居りしと言へば、定めて熊藏の仕事の腕前は存じて居らふ」

「ハイ存じて居ります」

「熊藏は仕事は、人並外れて達者か如何じや」

「へい〜仕事に掛ちや達者でござります

「たゞ達者では、賃銀の標準がつかんが如何じや、五人前も仕事が出来るか

「なかく〜以て……」

「なかく〜以て……其位ではないのか、然らば十人前もするののか

「へい〜恐れ入ります

「相判つた、大工熊藏は十人前の仕事を致す職人ぢやな、然らば其方は手間賃十人前宛、熊藏に拂つて居るのぢやつたナ

棟梁は烟に巻かれ、たゞへい〜と答へて居るばかり、元來大岡公の頼

智で、此剛愆の大屋を懲戒てやろうと思召したのもの、停滯つた家賃を請求し、其賃銀を受取らふと言ふのを、妨げ拒む譯に不可ないので、強慾爺の失策である、稼業道具を取上げたのを、廉に思ふ様油を絞つてやらんと、故意と熊藏の賃銀を高めやうとせらるゝのを、漸く棟梁三五郎も察し、嬉さ餘つて、頓狂聲で

「十人……十人前づゝ拂つて居ります

「何と十人……十人前とな、シテ見ると二十人前の賃銀を拂つて居つたのか

「へい〜」

「大したものじや、大工一人の手間錢三匁は、天下の通例二十人前とあれば、六十匁、些度高直の様ぢやが、夫だけの仕事が出来て、夫だけの賃錢を支拂ふ、天下の御掟には背き居らぬ、夫を大家平兵衛の爲めに、道具を取上げられ、仕事の出来ざりしは氣の毒千萬、幾日の間、道具無之に依り稼業を休んだ申立

「十日の間でございます

「家主平兵衛、速に其方が熊藏より受取るべき店錢金一兩を差引き金九兩を熊藏に支拂へ

「如何して九兩を拂ふのです

「如何してとは何だ、熊藏は一日一兩宛…げる男である夫が十日間、其方の爲めに稼げぬ決局十兩の稼業を、其方が妨げたのだ、其償却ひを申付けたのぢや

「夫は誠に御無理で、稼業を妨げやうと道具を取上げたのぢやない、家賃を取る爲めに仕たのです

「愚圖／＼申すな、店賃を取る爲に仕て、店賃が取れたのだから、彼は申さず稼業を休ました償ひ十兩金を拂ふのは當然じや、夫とも強つて償ひを致さぬと申さば、入牢申付るぞ

今日の時勢とは異い昔の事だ、お奉行から斯云はれば、此以上は返へす

言葉もなく、據なく九兩の金を熊藏に慾張爺は、涙をこぼしながら支拂つたのは、誠に小氣味のよき大岡の頓智裁判でありました。

三 三人正直一兩損智惠の裁判

現代の世の中から見れば、宛然で虚言の様である話だ、尤も爾言れても當然だ、此話に出る如き人物は、恐らく今日に求めても、絶對にあるまい、併し夫が事實に於て、有たのだから如何に當時の世の中が、豊かで緩りして居たかと想像され得る。

頃は享保年間の事であつた、八百屋の庄作と言ふ男が、神田から今日の本橋通りを、野菜物を籠に入れ擔いで來ると、一個の縞の木綿財布が落

てあつたを、何心なく拾ひ上げ中を檢めると、金が三兩這入つて居た、元來正直無類の庄作、是は定めて落した人は困つて居るであらう、必ず探して居るだらふ、早く遺失主を探し出して手渡を仕てやりたいと、猶も手掛りになる品はないかと、しらべて見ると。

芝口三丁目久助と言ふ、魚屋の財布であるらしい事が中にあつた、一葉の書附で分つたので庄作は、わざ／＼芝口へ出懸けて、久助と言ふ魚屋を探したが容易に知れない、終に其日は知れなかつた、其翌る日は稼業を休んで探しに出掛けた、漸く分明つた、が、容易く知れぬも道理であつた、久助は魚屋と言つても、魚を店へ並べて賣る、通常の魚屋じやな

い其日稼ぎの棒手振賣魚屋だ、夫も現住して居るなら未だしも、二三ヶ月程に、品川邊へ轉宅して終つたのであつた。

併し熱心にして正直者の、親切なる八百屋庄作は、夫から夫と毎日稼業を休んで、三四日諸方を探ね廻り、芝の高輪に住んで居る事を突留めやつとの事で、棒手振久助の寓居を尋ねて、先日拾ひし例の三兩入の、財布を返還に及ぼうとした、定めし貧乏者の久助の事ゆへ、喜んで禮を述べ受け納めるかと思ひの外冷笑ひながら

『八百屋の兄哥、汝は江戸ッ兒じやねへな、考へて見ねへ一旦何處へ遺失したか、失した金を今更らへイ有難うと言つて、受取れるものか取れ

ねへものか考へて見ねへ、遺失した己には此金は授らねへのだ、拾つたお前には授かつて居るのだ、遠慮なく其方へ取つて置ねへく
と言たまゝ手にだも觸れない、目もくれない、八百屋の庄作も亦た變り者だから眼に角立て怒りだした

『何だつて遺失した物を取らねつて、そんなら何故遺失すのだ、夫に何だと遠慮をせず取つて置けとは何つて言ふ言柄だ、白痴にするねへ、手前に渡してやらうと三日も四日も、稼業を休で探して歩いたのだ、愚圖く言ずを受取れく』

『何だと今聞けば何故遺失すのだと吐しやがつたナ、何も遺したくて遺

失したのじやねへが、己が金を大切にしねへ罪が當つて遺失したのだ、夫だからモ一其金は己の物じやねへのだ、夫れを受取れくとは人を白痴にするねへ、手前は其金を持つて速々と歸れく

「途方もねへ事を吐す野郎だ、此金を手前に受取らせねへ中は、貧乏動ぎも仕ねへで動かねへぞ

「巫山戯た事を吐す野郎だ、手前が歸らねへと吐しや、腕づくでも歸へぞす

「コリヤ面白へ、其方が爾吐すなら己も八百庄だ、腕づくでも其金は手前に返して見せるから覺悟をしろ

「生意氣な事を吐す野郎だ、手前が八百庄なら己も魚久だ、腕づくでも受取らねへ……

と爰に端なく腕力の立廻り、大喧嘩が始まつた、處へ此長屋の大屋が駈つけて來た此大家の爺は彦兵衛と言ふ人で、前回の大工熊藏の大屋とは大違ひ、至つて正直者で殊に親切の情深い人だから、此喧嘩の仲裁に入つて双方を引分け、種々に説諭してみたが、双方共頑として其主張を枉げないので止む事を得ずして、此裁判を大岡公のお手を煩す事にしたのであつた。

大岡越州公は、訴狀を見て兩人の馬鹿正直を憐れみて、八百庄、魚久、

大屋の爺の三人を呼び出して御取調べの上、越州公からも魚久に説諭したが、一旦遺失した金故如何あつても受取れぬとの一點張り、开處で越州公は一策を例の頓智に因つて、案出せられた上一同を御面前に呼び出し

「魚屋久助、其方は己の粗忽より金を遺失したるに因り、其金は受取らずとあらば夫にてよし、又八百屋庄作も己の所存にあらざる此金は、受取らぬと申條神妙の至り受取らざるもよし、併し双方とも其心の潔白を賞し、只今賞美金を遣はす、又家主彦兵衛は、斯る事件を自己が裁判をつくる事能はず、奉行所の手敷を煩はず段不埒につき、一兩金科料申付

る、ソレ久助、庄作には金二兩宛與へよ………一同立ませへ
裁判は解決した、考へ來れば三人一兩宛の損で、圓く納まつたのである
後世此事件を三人一兩損と稱し、大岡政談頓智裁判として、人々の賞美
したはこれである。

臨機 大岡越前守の頓智 終

和 田 文 寶 堂 出 版 目 録

浪 花 節 義 士 銘 々 傳	柔 術 と 擊 劍	大 岡 守 越 前 頓 智 談	抱 腹 絶 倒 滑 稽 笑 文 章	青 年 朗 吟 集	獨 吟 自 在 劍 舞 と 詩 集
全 一 冊 金 廿 五 錢	全 一 冊 金 十 八 錢	全 一 冊 金 八 錢	全 一 冊 金 八 錢	全 一 冊 金 十 二 錢	郵 税 ト モ 一 冊 金 十 二 錢

浪 花 節 義 士 銘 々 傳	大 正 習 字 手 紙 之 文	女 子 消 息 文 の し ほ り	文 學 士 伊 藤 先 生 閱 士 谷 圭 堂 先 生 編 書	文 學 士 伊 藤 先 生 閱 士 谷 圭 堂 先 生 著	新 習 字 書 翰 文
全 一 冊 金 廿 五 錢	全 一 冊 金 廿 五 錢	全 一 冊 金 四 十 錢	半 紙 刷 美 本	半 紙 刷 美 本	全 一 冊 金 四 十 錢

不 許 複 製

大 正 三 年 四 月 十 日 印 行
大 正 三 年 四 月 十 五 日 發 行

編 輯 者 頓 智 道 人
發 行 者 和 田 庄 藏
東 京 市 神 田 區 平 河 町 二 番 地
印 刷 者 秋 場 熊 太 郎
東 京 市 京 橋 區 本 八 丁 堀 一 ノ 十 五

發 行 所
和 田 文 寶 堂
東 京 市 神 田 區 平 河 町 二 番 地 和 泉 橋 際
(振 替 口 座 東 京 一 〇 九 〇 七 六)

◎ 居 新 本 買 安 各 東 書 版 錄 冊 用 是 郵 送 申
な し 買 々 各 出 目 壹 節 御 之 御 願 候
居 本 買 安 各 東 書 版 錄 冊 用 是 郵 送 申
な し 買 々 各 出 目 壹 節 御 之 御 願 候

來客御馳走

洋食のおけいこ

四六判袋入全壹冊

定價金十二錢
郵税金四錢

豚肉や牛肉に限つた譯でなくやくみと玉子が有れば素人にも何の品でも出来升又自宅製の洋食は費が少なく皿数が澤山でき極手に輕に十三四の御饗様方にも解り安く御客に日し方料理の心得食方なども記し有り即座に美味しい洋食が家内中召し上れます良書なり

曲譜詩入○ふし附き

新撰琵琶歌

菊判半裁形 全一冊 定價郵税金拾貳錢
頗る美本

書中目次

- 十能寺
- 川中島
- 迷悟もどき
- 飛鳥川
- 湊川
- 春日野
- 武藏野
- 太田道灌
- 俊寛
- 熊本籠城
- 平親王
- 花の親
- 金剛
- 七卿落
- 兒島高德
- 俊基東下り
- 那須與市
- 月下の陣
- 臺灣
- 城山

日用 往復はがき

郵税トモ 一冊 金十六錢

ふし 浪花節研究會

全 一冊 金二十錢

浪花節大博士

全 一冊 金十四錢

274
757



終

